

## 『伊勢物語』における笑い

—人物と語り手との関係—

ギユモ・オリアンヌ\*

### はじめに

『伊勢物語』は、日本の平安時代、9世紀末～10世紀前半頃に成立した歌物語である。歌物語は和歌を中心とした比較的短い物語（章段）を集めて成り立つ物語文学作品であり、『伊勢物語』の場合、最も流布している定家本には125の章段がある（以下、本研究では定家本の章段番号を示す）。作者は不明であり、複数の作者によって数十年かけて増補され続けて今ある形になったとする説が有力である。

本研究では、『伊勢物語』の「笑い」の要素に着目し、登場人物に対する語り手の批評の言葉を取り上げて考察する。平安時代の歌物語に関して、『平中物語』の主人公である平中（平定文）が滑稽な人物として知られるのに対して、『伊勢物語』の笑いに関する研究は不活発であるが、『伊勢物語』の笑いと言語手の批評との関係を考察することによって、『伊勢物語』の作品理解を更新しようと考える。

### I. 「あはれ」と滑稽の識別の難しさ

現在、『伊勢物語』の笑いに関する研究は少ないが、かつてこの問題が大きく扱われたことがあった。1916年から1921年にかけて刊行された『文学に現はれたる国民思想の研究』において、歴史学者の津田左右吉は、次のように述べている。

(A) 伊勢物語に、「かたみの翁板敷の下に這ひありきて」とか「蓑も笠も取りあへでしとゞにぬれて惑ひ来にけり」とかいふやうな、誇張したいひかたから来る滑稽、「百年に一とせ足らぬつくも髪」の姫に恋ひられた男、その男に嫌はれて「荊棘とも知らず走り惑」ふ姫の、不調和から生ずる滑稽、色このみの男を「いとまめに実やうにて、あだなる心無かりけり、」といひ、歌よみとして世に許されてゐたものを「もとより歌のことは知らざりければ」といひ、さては「昔の若人はさる好ける物思をなんしける、今の翁まさに為なんやは、」といふやうな、故らに反対のことをいつてゐることの明かに見える滑稽が、随所に累見してゐる。「男」を「翁」といつてあるのから既にさうである。(p.324)

(B) 昔から卑下の詞などと考へてゐた「さる歌のきたなげさよ」などいふのも、実は故らに嘲るやうにいひなした滑稽にすぎぬ。伊勢物語全体の調子がこの滑稽であつて、恋も情もみな滑稽に取扱はれてゐる。有名な五条わたりの忍びありきでも、「かの西の対に往きて、立ちて見みて見れど、去年に似るべくもあらず、打ち泣きて、あばらなる板敷に月の傾くまでふせりて、」といひ、「築地の崩れより通ひけり」といつてあるので、如何に滑稽的態度を作者が有つてゐたかがわかる。鬼一口は固よりである。(pp.324-325)

(C) 東下りの「道知れる人もなくて惑ひゆきけり」、「皆ひと餉の上に涙おとしてほとびにけ

\*パリ・ディドロ大学大学院生

り」、または別の条の「かななぎおんやうして、恋ひせじといふみそぎのぐしてなむ、いきける、」なども同様である。かういふ風に、まじめな、または平凡なことは勿論、あはれな光景までが滑稽化せられてゐる。初から滑稽につくられた老女の恋などはいふまでもない。(p.325)

津田は、『伊勢物語』の滑稽を「不調和から生ずる滑稽」と「誇張したい方からくる滑稽」と二つの種類に分け、さらに「故らに反対のことをいつてゐることの明かに見える滑稽」なども加えながら、「かういふ風に、まじめな、または平凡なことは勿論、あはれな光景までが滑稽化せられてゐる。」と論じている。また、近世文学を主な研究対象とした日本文学研究者麻生磯次は、1947年刊行の『笑の研究—日本文学の洒落性と滑稽の発達』のなかで「伊勢物語にも、全体の調子に滑稽味が感ぜられる。恋愛や哀傷の場面にしても、しみじみとした情感が盛られては居らず、却って滑稽的に取り扱はれてゐる場合が少なくない」と指摘している<sup>1</sup>。

それに対して滝瀬爵克は、『伊勢物語』を専門的に研究する立場から津田に反論した。ただし、滝瀬も『伊勢物語』に滑稽の要素があることは否定しない。滝瀬は、津田左右吉が「伊勢物語全体の調子がこの滑稽」であると述べたことに反対し、「ある時は不調和な、時にはまた誇張した滑稽な表現を用いることで、かえって「あはれな光景」みやびにしてあわれな情趣を表出するために役立てているのであることが理解される」と論じている<sup>2</sup>。滝瀬は、津田が滑稽さを表すとした『伊勢物語』中の文章を個別具体的に検討していくが、例えば第九段に関する説明を引用すると、以下のようである。

(D) 第九段の説話は、よく知られている東下りの一つで、東国紀行風の形式を与えて描いている。そこでは京人がはるばる東国の僻地へきて、

つりのりゆく旅愁、とりわけ京に残してきた妻を恋慕う情念にかられるという、住みなれたみやびな京と、そこに住む妻への恋慕の情の「あはれ」さが表現されている。だから「道知れる人もなくて惑ひゆきけり」とか、「皆ひと餉の上に涙おとしてほとびにけり」という表現は、それ自体としては滑稽に感じるかも知れないが、この説話のうちにあつては、むしろさきの「あはれ」さを極度に高調するために、描出の面で効果的に役立てられているのである。(pp.143-144)

このように、『伊勢物語』中の滑稽の要素は、読者を引きつけ、「あはれ」「みやび」を強調して読者の心に染み入らせるための方法、表現技術であり、各章段、さらに『伊勢物語』全体の基調は「あはれ」「みやび」のほうにあると、滝瀬は説いている。

津田左右吉は、『伊勢物語』では、まじめなこと、平凡なこと、「あはれ」な光景が滑稽化されていると論じ、滝瀬爵克は逆方向を向くように、『伊勢物語』中の滑稽な表現は、「あはれ」「みやび」の主題を強力に表現するための手段だと論ずる。ここで、津田と滝瀬とのどちらが正しいのかを考えても、有益ではあるまい。ここで重要なのは、笑いの要素が「あはれな光景」を滑稽化するにせよ、哀れな情趣を表出させるにせよ、『伊勢物語』が悲壯を伴った笑いの作品であることを否定できない点である。

## II. 突破口としての語り手の批評

『伊勢物語』の基調は「あはれ」なのか滑稽なのかを直接に問うならば、読者の受け止め方の相違によることとなってしまう、解決しがたい。「あはれ」と滑稽とをめぐる難問を突破するため、語り手が登場人物を批判的に批評する言葉に注目したい。『伊勢物語』では、登場人物の言動に対して、語り手がきびしい批判の言葉を投げかけるこ

とがある。103段で「男」が詠んだ「寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな」は、『古今集』に「業平朝臣」の作としてある和歌でもあるが、この和歌について『伊勢物語』の語り手は「さる歌のきたなげさよ」<sup>3</sup>（103段）と評する。また、田舎女に対して「女、限りなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を見ては、いかがはせむは。」<sup>4</sup>（15段）という。こうした語り手の批評には登場人物の言動を嘲笑する傾向があると見て取れる。

「笑い」の専門家のサレーユ・ジャンが『滑稽のエクリチュール』では、悲壮な話と滑稽な話との大きな違いは「批評」であると指摘している。「読者が登場人物を同情している立場から話の批評者になる」<sup>5</sup>。『伊勢物語』では、批判や批評の表現が多い。語り手が登場人物の言動を批評したり批判したりして直接に現れることが一つの特徴である。山本登朗は「批判や批評をしていますが、実はそれは、親密さに裏付けられた、どこかユーモラスな雰囲気を持ったものであったのである。」<sup>6</sup>と論じている。

「あはれ」と笑い（滑稽）との識別は、精密に論じようとするとも考察が行き詰まってしまうが、語り手による批評の存在が判断の手がかりになると考えられる。

『伊勢物語』における語り手の批評をすべて扱うことは不可能なので、本研究ではその手始めとして、『伊勢物語』40段を分析して、語り手の批判と笑いとの関係について考えることとする。以下、初めにどのように語り手が自分の批判を提示して悲哀を排除しているかについて考察し、次に語り手の批判に含まれる矛盾や逆説からユーモラスまた皮肉な表現として扱われる可能性について論じ、最後に40段の末尾と類似する初段の末尾を取り上げて比較し、新しい読み方について考えたいと思う。

### Ⅲ. 同情から批判まで

『伊勢物語』の中には、愛する人との別れを語る哀切な話はいくつかある。そのような話では、別れに関する恋愛の苦しさを集中的に語る。40段が一つの例である。

40段の内容は、若い男が愛する女性と離れ離れにさせられた物語である。若い男が召使の女を愛したが、男の親は、身分違いを理由に仲を引き裂こうとする。男はまだ親がかりの身なので、親に抵抗するすべのないまま、女との別れに直面せざるをえない。親は女を急遽放逐した。その別れが余りに辛くて、男は気絶してしまうのだ。

にはかに、親、この女を追ひうつ。男、血の涙を流せども、とどむるよしなし。率ていでていぬ。男、泣く泣くよめる。

いでていなばたれか別れのかたからむありしにまさる今日は悲しも

とよみて絶え入りにけり。親あわてにけり。なほ思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、真実に絶え入りにければ、まどひて願立てけり。今日のいりあひばかりに絶え入りて、またの日の戌の時ばかりになむ、からうじていきいでたりける。

むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。今のおきな、まさにしなむや<sup>7</sup>

男の「いでていなば…」の和歌は、「(女が自分の意志で) 出て行ったならば、いったい誰が別れがたいと思うだろうか、いや別れは必然だと思うだろう。(しかしそうではなくて、女は無理やりに連れ出されたのだから) 以前にも増して恋しさのつる今日は悲しみの極まることだ」の意である。

このエピソードにはあわれな情趣が特に強いと言える。「血の涙を流せども、とどむるよしなし」

「とよみて絶え入りにけり」、「真実に絶え入りにければ」、「今日のいりあひばかりに絶え入りて」のように、好きな女と別れた後の、男の苦しさが激しく具体的に描写されている。「絶え入る」は、意識を失うの意である。ただし、40段はそこで終わらなくて、「むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。今のおきな、まさにしなむや」という語り手の感想を添える。語り手の立場から、語り手自身の見方を読者に提示する。語り手が話の流れを中止して、作中人物と読者との間に距離感を生じさせる。語り手の評言により、男の愛する者との別れに対して感動させる話から考えさせる話へ、男の恋の情熱に対する感動的な内容から感情を排した知的な分析へと移行している。

40段は、若い男と召使いとの恋と、それに対する親の反対を語ることで、身分の違いの恋をテーマとしているが、末尾にある語り手の感想は別のテーマに向かう。昔と今との比較を通して見えてくる、恋愛に対する昔と今との異なる姿勢が、新しいテーマになる。その新しいテーマを語るための材料が、若い男の熱心な恋となるのである。

#### IV. 40段の末尾：称揚か非難

40段末尾の語り手の批評は、「むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。今のおきな、まさにしなむや」という二文で構成されている。最初の文は「昔」という言葉で始めて、この話の若い男を指している。次の文は、「今」という言葉で始めて、今の語りの現在のことをいう。この章段末尾の文において、「昔」が「今」と対立させられていることが明らかである。ただし、内容について考えると、ただ「昔」と「今」を比較するばかりではなく、「昔の若人」と「今の翁」とが対立させられている。「昔の若人」は「今のおきな」であるとするならば、すなわち語り手が自分自身と対立しているように見える。同一なものとの対立は大きな矛盾であって、笑いのナンセンスに他な

らないだろう。

さて、どうして語り手はそのような対比について述べるのか。この記述については二つの捉え方がある。まず、「分別くさい年寄りには、こんな恋はとてできるものではない。親がかりの少年にすぎない男が召使いの女に思いをかけたからとて、世の中の掟として二人の仲りは晴れて存立しうべくもないのである。にもかかわらず男は命に変えてに恋情を生きる。この情熱の燃焼はまさに若人の特権なものであろう。」<sup>8</sup>という説である。「昔の若人」と「今の翁」が違う人物を指すと捉え、語り手が、熱情に関する若者と老人との違いを明らかにすることを目指すという捉え方である。

一方で片桐洋一などによる、「この「昔の若人」が、実は「今の翁」その人である、すなわち「若人」と「翁」は共通の人物であるという前提を設ければ、比較してもおかしくない、筋道は立つのである。「今、こんな爺さんになってどうしようもないが、私も、昔、若人の時には、こんなに熱烈な恋をしたんだ。しかし、今の翁には、そんなこと全くできはしないよ。」というように、語り手が今の翁として自分の過去を回想する話を語っているという説である。

これらの二つの捉え方が、語り手の立場の違いを示している。前者の説は、「昔の若人」と「今の翁」とを異なる人物とし、「情熱の燃焼はまさに若人の特権」であると捉えて、若い人の熱情を強調する。それに対して、後者の説ではどのような理解になるのか、やや詳しく考えてみたい。後者のように、昔の若人がと今の翁が同一人だとすれば、語り手の翁が自分の過去を回想して、翁の体験を強調することになる。そして、昔を懐かしむ思いを込めつつ体験者としての翁の立場から、昔の若い人を非難する言葉を加えていると言える。語り手は、若い人の姿勢を「すける物思ひ」と表現している。山本登朗によると、平安時代の文学では「すく」という言葉が「否定的な感情や

批評を伴って」<sup>9</sup>用いられていた。また、「物思ひ」は「精神的に苦しむこと。恋に悩む場合が多い」と片桐洋一は示している<sup>10</sup>。それらをふまえると、語り手が若い人の熱情を讃えるというより、昔に対して懐かしい気持ちを持ちつつも、過去の自身を自嘲していると理解できる。

## V. 40段と初段の比較

『伊勢物語』では、語り手が今の立場から話を語って、その立場から今と比較して過去を読み替えているように思われる。40段とともに、語り手のそうした姿勢がよく示されているのは、初段末尾の一文である。

初段では、元服したばかりの昔男の主人公が、奈良の春日の里に狩に出かけた時に、偶然美しい姉妹をかいま見て夢中になり、狩衣の袖を破って恋歌を贈る。そうして末尾には、「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」という語り手の注が添えられている。

初段には、「みやび」の語が『伊勢物語』全体を通しての唯一例としてあり、大事な章段だとされる。福井貞助によると、「全て青春の趣である。優美な女性を垣間見て、激しく心を動かし、直ちに読んだ恋歌を強調し、若々しい恋をたたえて発端とする」<sup>11</sup>話である。40段のように明示的ではないが、初段でも「昔人」と「今人」とが対照的に扱われている。40段と同様に、初段でも、語り手は、物語の「男」と同じように熱烈な行動をしていた「昔」を愚弄していると思われる。「昔人はそれをしたが、今の人はそんなことしない」という語り手の主張が、初段と40段とに共通する。

初段では、主人公の行動の速さ、過去の和歌の本歌取り、裾を破ることなどが洗練された行動として語られ、主人公の「男」は理想的な人物として現れる。そこでは語り手の注釈が昔人の態度を「みやび(雅)」と表現し、昔人の理想的な言動を明らかにすることを目指すように思われる。しか

し、一方で、初段末尾の語り手の評言では「みやび」に「いちはやき」という語を添えている。「いちはやし」という言葉は「素早い」または「てつとりばやい」などの意味を持っている。日本語学者の築島裕は、「いちはやし」は「時間的な速度を示す語ではなく、程度が激しい、熱例だ」<sup>12</sup>と主張した。また、山本登朗は、平安時代文学における「いちはやし」の13例を取り上げて「一般に、否定的評価や否定的感情を伴って用いられる語であったこと」<sup>13</sup>を指摘し、「いちはやし」が褒め言葉としては使われず、否定的評価や否定的感動を伴って用いられる語であることを明らかにした。山本登朗は、その末尾の解釈について、次のような二つの案を示した。

a) 昔の人は、このようにあまりにも度を超えて風雅の振る舞いをしたのであった。

b) 昔の人は、このように、あまりにもせっかちな風雅の振る舞いをしたのであった。

あまりにも度を超えた風雅の振る舞いにせよ(築島説による解釈)、あまりにもせっかちな風雅の振る舞いにせよ、「いちはやし」は異常な振る舞いを示すとする理解を、私も採用する。理想的な言動という「みやび」と否定的な価値を持つ「いちはやし」という語を同時に使うことが、不自然であると言える。反対の意味を持つ言葉を使うことによって矛盾が生じ、語り手の表現がアイロニカルとして使われているように思われる。

「みやび」という言葉と「いちはやし」の使い方について考えると、初段の語り手は主人公の熱心を称えているのではなく、若人の情熱的な言動を揶揄していると理解できる。また、「いちはやし」の語義は山本の言うとおりであり、このように主人公に否定的評価を与えるのは、主人公の「昔人」は、語り手人身の昔の姿であったからだと考えられる。40段と同じように、初段でも、語り手が自分の過去を回想し、過去の言動を愚弄し

ていると思われる。そのように、「いちはやし」という表現は、語り手の自嘲を含むと考えられる。

ここで40段の考察に戻ろう。初段と40段とは、共通点が多い。ともに若い男を主人公とし、末尾で若い男を昔の代表者とする。これら二つの末尾には、「いちはやきみやび」(初段)、「すける物思ひ」(40段)のように、ともに内容的に強い矛盾を含んでいる。また、40段の末尾「むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。今のおきな、まさにしなむや」は、一見すると明瞭な対比になっていない。昔の若人と今の若人とが並列されていれば、対比が明らかとなるが、昔の若人と今の翁とが対置されているために、ねじれがあるように思える。これについては、「この段は、まさしく翁が自らの若き日を回想して語る「翁語り」として書かれていると見れば、よくわかるのである」<sup>14</sup>という片桐洋一の説明を参照する。こうしたやや晦渋な言い回しに注意すると、語り手が、本気でその過去を否定しているとは言えない。否定というより、皮肉ではないかと思われる。そのようにして、語り手が、情熱的な行動をする若人を愚弄しているのだと思われる。初段と40段の末尾には、翁がみずから自分の過去を回顧した結果として、今もう存在しない昔に対する嘆きと共に自分の青春に対する揶揄が含まれていると解せるだろう。

## 結論

本研究は、近年等閑に付された感のある、『伊勢物語』の笑いの要素を、作品理解更新のために活用すべく、40段および初段末尾の語り手の評言を取り上げて考察した。従来、初段や40段末尾の語り手の評言は、昔男の恋愛行動の称揚として理解されてきたが、そうではなく、むしろ語り手の揶揄を示していることを、以上の考察で論じてきた。語り手が主人公の行動を称えているとすると、昔人の態度を表現するのに「いちはやし」や

「すける」という否定的な価値を持つ言葉を使う理由が説明できない。

ただし、語り手の言葉が批判的な様相を持って矛盾のないし逆説的な言い方であることに注意すると語り手が本気でその過去を否定しているとは言えず、否定というより、皮肉と解するのが適当だと考えられる。初段と40段の末尾には、語り手の翁がみずから自分の過去を振り返った上での、今もう存在しない昔への哀惜と共に自分の青春に対する揶揄が含まれていると言えるだろう。

さらに、同じように、昔から卑下の言葉などとされていた「さる歌のきたなげさよ」なども、実はことさらに自ら嘲るようにいいなした笑いではないかと考えられるが、これらについては今後の課題としたい。

『伊勢物語』の語り手は、若者の情熱に対して、慈愛を込めて「苦笑」していると解せるとの主張を、本研究の結論とする。

## 【注】

- 1 麻生磯次『笑の研究—日本文学の洒落性と滑稽の発達』、163頁
- 2 滝瀬爵克『伊勢物語私論』、147頁
- 3 『伊勢物語』日本古典文学全集12、203頁
- 4 『伊勢物語』日本古典文学全集12、127頁
- 5 Sareil Jean, L'écriture comique, 107頁
- 6 山本登朗、「いちはやきみやび」—伊勢物語の主人公と語り手—『王朝文学の本質と変容』和泉書院、40頁
- 7 『伊勢物語』新編日本古典文学全集 12、148頁
- 8 秋山虔、『伊勢物語』新日本古典文学大系17、119頁
- 9 山本登朗、「いちはやきみやび」—伊勢物語の主人公と語り手—『王朝文学の本質と変容』和泉書院、35頁
- 10 片桐洋一、『伊勢物語全読解』、310頁
- 11 『伊勢物語』日本古典文学全集12、214頁
- 12 築島裕、「伊勢物語の解釈と文法上の問題点」(『講座解釈と文法4』明治書院 1960年)
- 13 山本登朗、「いちはやきみやび」—伊勢物語の主人公と語り手—(『王朝文学の本質と変容』和泉書院) 36頁
- 14 片桐洋一、『伊勢物語全読解』、310頁

【参考文献】

『伊勢物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集12  
（小学館）による。

秋山虔、『伊勢物語』（新日本古典文学大系17（岩波書  
店 1997年）

麻生磯次、『笑の研究—日本文学の洒落性と滑稽の発  
達』東京堂 再版 1949年

片桐洋一、『伊勢物語全読解』、和泉書院 2013年

築島裕、「伊勢物語の解釈と文法上の問題点」（『講座  
解釈と文法4』明治書院 1960年）

滝瀬爵克、『伊勢物語私論—みやびとその文学性—』  
明治書院 1983年

津田左右吉、『文学に現はれたる国民思想の研究』岩  
波書店 1977年

山本登朗、「いちはやきみやび」—伊勢物語の主人  
公と語り手—『王朝文学の本質と変容』和泉書院  
21-44頁 1999年11月

Sareil Jean, *L'écriture comique*, PUF, 1984年